

開拓の母、偉大なる渡邊カネ

(1859 - 1945)



渡邊カネが帯広開拓の祖・依田勉三の世話により、「晩成社」の一員渡邊勝のもとへ嫁いだのは明治16(1883)年です。カネが夫や兄(鈴木銃太郎)が待つ下帯広村に着いたのは、晩成社の一行が到着した5カ月後でした。

英語が堪能で教養豊かであったカネは、村に着いたらすぐに塾を開き、子どもたちを集めて読み・書きを教え始めます。そのころはやったマラリア性の熱病で人々は苦しみますが、カネは外国の薬で多くの人を救います。また、晩成社の仕事がうまくいかないため、人々が逃げ出そうとしたときには、人々をなぐさめ、励まし続けました。

大正11(1922)年、夫である勝が亡くなってからは、女手ひとつで開拓や教育の仕事、子育てをやり抜きます。カネが74歳になった昭和7(1932)年、晩成社は解散、その翌年、帯広は市になりました。カネが生涯を通じてかかわった晩成社の仕事は失敗に終わりましたが、晩成社がやろうとしていたこと、そしてカネの教育への情熱はその後の十勝の人々に受け継がれ、現在の十勝発展の基盤となっています。

OBIHIRO HISTORY

下帯広村へ向けて伊豆を出発する前夜に「目的を達成するまではこじきになっても帰らない」という決意を込めて写真を撮る依田勉三。



ランダーの油絵
明治23年、英国人の探検家サベージ・ランダーがアイヌの民俗調査で3日間滞在した渡邊勝宅をスケッチし、後日油絵にして贈られたもの。

帯広の幕開け

蝦夷地(北海道)には既に先住民のアイヌの人々が、独自の文化を築いていました。南部の渡島半島から始まった和人の進出は、江戸時代に入ると漁場確保やアイヌの人々との交易のために沿岸全域に広がりました。そうした中、和人として初めて帯広の地に足を踏み入れたのは、寛政12(1800)年、皆川周太夫でした。続いて安政5(1858)年には松浦武四郎がアイヌの人々の道案内で詳しく調査し、将来有望な地であることを「十勝日誌」で紹介しました。明治2(1869)年、蝦夷地は北海道と改称され、十勝国(現在のほぼ十勝支庁域)を創設。帯広の前身の河西郡下帯広村が誕生しました。

帯広の名の由来は、アイヌ語のオペレペレケ(川尻がいくつも裂けているところ)がなまってオペリペリ、そして帯広(おびひろ)になったと考えられています。また、先人たちのアイヌ文化は、帯広カムイトウウボが保存会の古式舞踊などを通して伝承されています。

晩成社と開拓移民

帯広の本格的な開拓は、依田勉三と鈴木銃太郎が調査に入った翌年の明治16(1883)年5月に依田

勉三の率いる「晩成社(明治15年1月、現在の静岡県松崎町で結成)」一行27人が、下帯広村に入植したことから始まります。彼らは度重なる冷害やバッタ、ノネズミの襲来など、苦難の開墾生活を送りましたが、労報われず、事業としては失敗に終わりました。しかし、その後の十勝の産業興隆に大きな功績を残しました。

十勝の開拓は、北海道に多く見られる官主導の屯田兵によるものではなく、晩成社をはじめ、富山、岐阜など本州からの民間の開拓移民により進められました。

市街地の誕生

晩成社が帯広に入植した10年後の明治26年には、現在の国道38号沿いに集落が形成されました。その後明治28(1895)年、北海道集治監十勝分監の開庁とともに受刑者によって大通(当時は監獄道路と呼ばれた)が整備され、市街地誕生の基礎となりました。以後下帯広村は、明治35(1902)年に十勝で最初の町となり、昭和8(1933)年には市制が施行されました。今ではJR帯広駅から北へ延びる西2条(通称：平原通り)を中心市街地として南西へ広がり、人口も約17万5千人を有し、道内の

主要都市へと成長しています。

道路網は碁盤の目状ですが、アメリカのワシントン市を模したものとされる「火防線(現在は公園緑地と生活道路へ整備変更)」と称する斜交道路を持つのが特徴です。

基幹産業の確立

開拓当時、農地の開墾は多大な労力を必要とし、それを助けたのは農耕馬でした。昭和30年代に入ってトラクターなど機械化が進み、農地の規模も次第に拡大しました。また、冷湿害に強い農作物の品種改良や農地の基盤整備も進み、足腰の強い農業へ脱皮しました。この間、昭和32(1957)年に農村地帯の川西、大正両村と合併し、基幹産業である農業基盤が確立しました。

本市の農業は、大型機械による大規模畑作経営が中心で、1戸当たりの平均耕地面積は約24.4haになります。主な作物は、小麦、ビート、ジャガイモ、豆類ですが、近年は特産野菜の長イモ、ゴボウなどの生産も進み、日本の食料基地として揺るぎない発展を続けています。



帯広カムイトウウボが保存会(国の重要無形民俗文化財)



明治30年代の帯広市街地図

帯広発祥の地記念碑

帯広発祥の地



晩成社移民団

依田勉三

渡邊勝